

美術家書誌と展覧会カタログ、そして展覧会図録

中島 理壽

1. 展覧会カタログにおける美術家書誌

(1) 『美術家書誌の書誌』(勉誠出版 2007年12月刊行) を編んで

- ・本書は、日本語による「美術書誌の書誌」のうちの 人物書誌編 として編纂
- ・副題に「雪舟から東芋、ヴァン・エイクからイ・ブルまで」とあるように、古今東西の美術作家と美術関係者を対象としている(約2600名)
- ・美術家書誌を収録している刊行物
作品集、美術全集、研究書・著作集・評伝、美術雑誌特集号、展覧会カタログ
その中でも「展覧会カタログ」が3分2を超え、全刊行物のうち「展覧会カタログ」が占める割合はさらに年を追うごとに高まりをみせている。

(2) 展覧会カタログは美術家書誌の宝庫

- ・日本では年々、主として美術館学芸員によって、展覧会の数だけの美術家書誌が編まれ、他の芸術分野、人文科学では考えられない現象が展開されている。
- ・高い評価が与えられる反面、その背景には(美術館の学芸活動が研究調査活動とするならば)看過できない問題点をはらんでいる。他の芸術分野では考えられない ということは一つの美術家書誌を編むには相当数の年月が必要となり、そう簡単に量産はできないわけで、そこには安易な編纂が横行していることになる。参考にした、と記して先行の既存の書誌を再使用しつつ新たに編纂したかのように繕う美術家書誌が展覧会カタログに収載されているのである。

2. 美術家書誌における展覧会カタログの位置づけ

(1) 重視と羅列

- ・作家研究における展覧会カタログの役割を認識しているかどうかで、記載の濃淡が生じ、出版事項とともに「論考+カタログ+資料編」を記載する形と「展名+発行所+発行年+開催美術館名」という出版事項にとどめる形がある。
- ・展覧会カタログを重点的に取り上げた美術家書誌がみられるようになってきた。

(2) 冒頭か、末尾か

- ・個々の書誌における展覧会カタログを収める位置が、冒頭に置かれる形と末尾に

置く形がある。

- (3) 消される美術家書誌 展
・「年譜」もそうだが、展覧会カタログに収載 2009年3月
された「文献目録」を目録上から消す場合が 論()
多い。 カタログ(編)
(4) 様々な呼称 (小見出し) 文献目録(編)
・展覧会カタログ、展覧会図録、展覧会目録、個展カタログ

3. あなたは「展覧会カタログ」派？ それとも「展覧会図録派」？ あらためて展覧会カタログを見直す

(1) 揺れ動く呼称 (用語)

本シンポジウムの参考文献として挙げられている荒谷宏美さんの「展示会カタログの収集と提供」でも、次の用語が使われている。

展示会カタログ、展覧会図録、展覧会リーフレット、展覧会カタログ、

(2) 様々な表情をみせる展覧会カタログ

作り手、使い手、扱い手などによって、それぞれの個人の思い入れによって、世代によって、様々な呼称が用いられる。ということは、どこ(内容、機能、形状など)を重視するかによって呼称が異なることが分かる。

(3) 歴史的にみると

- ・展覧会カタログが未成熟の時代、戦前は「展覧会図録」が主流であり、「図書」と「図録」のはっきりした区分はなかった。

例：『第1回淡交会図録』(1924年11月) = 東近美や東文研では「図書」として、都現美や横浜美術館では「展覧会カタログ」として扱っている。

- ・企画展カタログ 戦後、欧米の展覧会カタログ事情の理解が進むにしたがって、学芸力と経済力の向上とともに、「企画展カタログ」が大きくクローズアップされ、展覧会カタログ = 企画展カタログという構図が確立する。
- ・企画展カタログの三要素
展覧会カタログの基本形は、「カタログ」を核にして、冒頭の「論考編」と巻末の「資料編」とで構成される。
- ・ただ、「企画展カタログだけでは年譜は編むことはできない」という現実があり、そ

の展覧会が「新作展」か「旧作展」か、というもう一つの理解、認識が求められる。

(4) もう一つの展覧会カタログ群 = 新作展カタログ

- ・新作展カタログ = 作品図版そのものが最大の情報。「展覧会図録」と呼称されてきた。
 - ・旧作展カタログ = 企画展カタログの大部分がこれに該当し、小冊子と呼ばれていた時代の展覧会カタログにとって代わって、作品情報(いわゆる「カタログ」という根幹)の充実が図られた本格的な「展覧会カタログ」時代が生まれることになる。
 - ・新作展カタログ
 - a 個展カタログ、グループ展カタログ(展覧会リーフレット)
 - b 画廊企画展カタログ(戦前は必ずと言ってよいほど「新作画展」とされた)
 - c 美術家団体定期展(公募展)カタログ
 - ・展覧会カタログ
 - A 企画展カタログ(今橋映子編『展覧会カタログの愉しみ』によって市民権獲得)
 - B 新作展カタログ(歴史的には「展覧会図録」「展覧会目録」から成る)
- この「新作展カタログ」の収集と充実が、美術館図書室の次なる課題となっている。

略歴

中島理壽(なかじま まさとし)

1944年東京生まれ。法政大学文学部日本文学科卒業、70年都立日比谷図書館(都立中央図書館)司書となり、75年東京都美術館に異動、日本で最初の本格的な公開美術館図書室の開室準備・運営にあたる。86年美術ドキュメンタリストとして独立、美術資料を基にした表現活動(書誌、年譜、年表、年史の編纂など)を展開。この間、多摩美術大学芸術学科非常勤講師、国立新美術館客員研究員をつとめ、2008年第2回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会推進賞を受賞。主な編纂書に『近世人名録集成』全5巻(1976-78年)、『近代画家研究資料 佐伯祐三』全3巻(79-80年)、『美術新報総目録』(85年)、『昭和・物故の美術家たち』(90年)、「日本の美術展覧会開催実績報告書 1945-2000」(2003年)、「同 2001-03」(04年)、「同 2004-05」(08年)、『美術家書誌の書誌』(07年)がある。